社会心理学におけるコミュニケーション・アコモデーション理論の応用

栗　林　克　匡

目　次

1．はじめに
2．CATの基本原理
3．アコモデーションの方略
4．アコモデーションの動機
5．アコモデーションの評価
6．CATの適用
7．社会心理学におけるCATの応用

1．はじめに

普段使っている言葉が互いに異なる者同士の会話はどのようになされるのであろうか。例えば，東京出身の初老の男性英語教師と大阪出身の女子学生とアメリカから来た交換留学生の男子学生の3人が雑談をする場合どうなるであろうか。会話は英語でなされるのかそれとも日本語でなされるのか。日本語だとしたら標準語なのか大阪弁なのか。おそらくその場ではお互いに他者の話し方に注意を向け，3名が同時に自分の話し方を調整すると考えられる。話し方には，言語，方言，発音，語彙の多様性，話のスピード，声の大きさ，休止，発話の長さといった音声的要素や，身振りや姿勢といった非言語的要素が含まれている。この状況ではそれら話し方へ影響を与える様々な要因が絡み合っている。例えば，会話者の性別，年齢，出身地，地位などは，誰がどの程度他者に合わせるように自身の話し方を調整するのかに影響を与えると考えられる。

このような現象を説明する理論が，コミュニケーション・アコモデーション理論（Communication Accommodation Theory：以下CATと略す）である。

本稿では，Giles & Ogay（2007）を参考にしながらCATの概要を紹介し（セクション2～6），社会心理学における応用について考察する。

2．CATの基本原理

この理論の発端は，会話場面における言語使用に焦点を当てたスピーチ・アコモデーション理論（Speech Accommodation Theory：以下SATと略す）にある（Giles, 1973）。当初は，バイリンガルな2国間の話者の会話（Giles, Taylor, & Bourhis, 1973）や，同言語でも発音の異なる2者の会話（Coupland, 1984）などが中心的な研究の対象であった。Giles, Mulac, Bradac, & Johnson（1987）の論文では，SATからCATへと呼称を発展的に変更し，「自己呈示」あるいは「印象操作」のプロセスを理論的源泉として取り入れることを試みている。SAT/CATは言語学と社会心理学にまたがる理論といえよう。

なおアコモデーション[1)]とは，辞書的には「人に便宜をはかること，調整，適応」とい

キーワード：コミュニケーション・アコモデーション理論（CAT），同調傾向，自己呈示，社会的アイデンティティ

う意味であるが，Giles & Ogay（2007）では，「個人のコミュニケーション行動を変化させることで，他者との社会的距離を近づけたり遠ざけたりすること」と定義されている。

Giles & Ogay (2007) は，CATの基本原理として以下の4つを挙げている。

(1)　コミュニケーションは，その場の状況や参加者の初期方向性の特徴だけでなく，相互作用が埋め込まれた社会歴史的文脈（socio-historical context）によっても影響される。太平洋戦争を知るアジア（韓国や中国）の人の中には反日感情を抱く人もいる。その戦争に直接関わっていない若い世代の人々同士の国際交流においても，そういった反日感情の影響が現れる可能性がある。我々は様々な集団に属している。2者の出会い場面において，各自の集団の持つ社会的歴史的文脈が，2者の相互作用（会話）に作用するのである。特に，文化的・民族的に所属する集団が異なる場合の2者関係を検討する際には，「民族言語学的バイタリティ」(Giles & Johnson, 1987）が比較される。これは，経済や政治の強大さ，言語の格調の高さといった「地位（status)」，人口，出生率，地理的分布といった「人口統計学（demography)」，権威者や教育機関や政府機関による集団と集団言語の（優勢度の）認識といった「制度的支援（institutional support)」の3つの要因によって測定される（図1参照)。高いバイタリティを持つ集団は優位に立つので，その集団に属する者は相手に対して自分の独自性を強調する方略で相手とコミュニケーションをとりやすくなることが予想される。

(2)　コミュニケーションは，単なる事実や考えや感情についての情報交換という「指示的意味の交換」だけでなく，アコモデーションを通して行う「個人的・社会的アイデンティティの交渉」の両方を含んでいる。冒頭に挙げた状況において，もし大阪出身の女子学生がかたくなに関西弁を押し通して話すならば，関西人というアイデンティティを固持し，他者へアピールしていることになる。

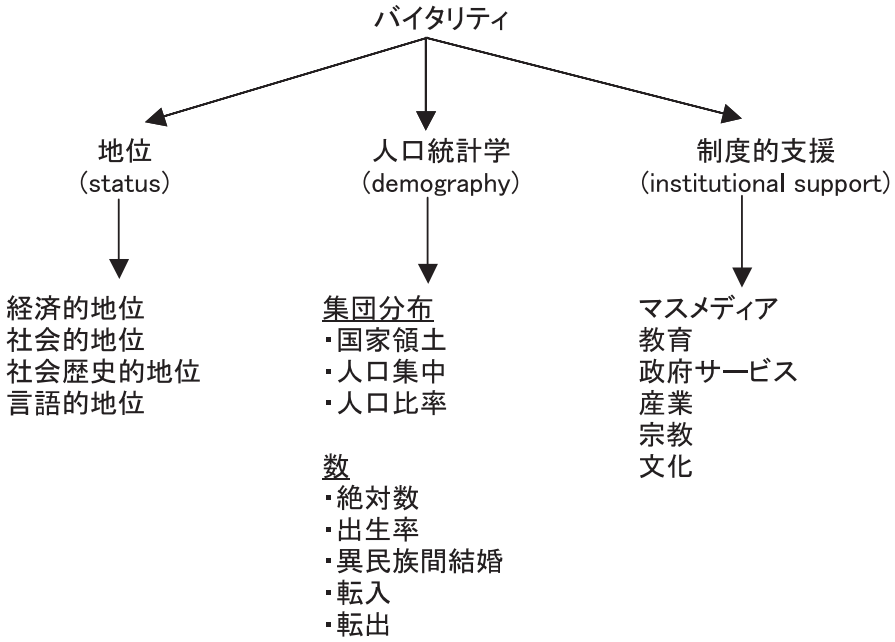

図1　民族言語学的バイタリティに影響を与える変数の分類(Giles, Bourhis, & Taylor, 1977)

⑶　相互作用する者は最適なレベルのアコモデーションについての期待を持っている。これらの期待は，広く行き渡っている社会的・状況的規範や，外集団メンバーに対するステレオタイプが基となっている。アコモデーションの有無，過多過少の判断によって，相互作用の継続か離脱が決定される。

⑷　相互作用する者は，各自および各自の社会的グループに対して自身の態度を示すために特定のコミュニケーション方略－収束（convergence）か分岐（divergence）－を用いる。この方略については次のセクションで説明を行う。

3．アコモデーションの方略

CAT では，他者（対話者）とのコミュニケーションを調整する方略として，「収束」と「分岐」および「維持（maintenance）」を挙げている。冒頭の状況を考えてみると，標準的な日本語で会話がなされた場合，教師の話し方に合わせて，女子学生と男子留学生が自分の話し方を調整するような場合は，「収束」したと見なされる。収束とは，個人が自分の広範な言語的（発話レート，アクセント），パラ言語（休止，発話の長さ），非言語的特徴（微笑み，凝視）といった行動を，対話者の行動と類似したものになるように調整することを指す。逆に，例えば自分の郷土についての雑談の場合，自分自身の話し方をあえて強調して独自色を出そうとして，大阪出身の女子学生が関西弁で話すような場合は「分岐」したと見なされる。分岐とは，自分と他者の言語的・非言語的差異を強調することを指す。なお分岐と似ているが「維持」は，独自性を強調するわけではなく，普段の自分のスタイルをそのまま保つ話し方をとる場合である。

ここで CAT（SAT）の実践的研究としては最初期に行われた Giles et al.（1973）の研究を紹介する。この研究は，発話における収束という考え方を理解する上で有用と思われるので，少し詳しく紹介する。この研究では，異なった言語を用いる民族集団間の相互作用場面を取り上げている。英語とフランス語のバイリンガルのイギリス系カナダ人（EC）の実験参加者は，フランス系カナダ人（FC）が港の風景を口述した録音テープの聴き取りをした。なお，録音テープを聴く前に，話し手の FC もバイリンガルであること，聞き手となる自分たちもバイリンガルであることを話し手の FC が知っていること，録音された話し方は，FC が意図的に選択した話し方であることが，教示されている。FC が録音の際に使用した言語は，「流暢ではない英語」「流暢な英語」「フランス語と英語の混合」「フランス語」の 4 パターンあり，前者ほど FC が EC に対して収束への努力をしたと見なすことができる。EC は FC による風景描写のテープを聴いた後に，その FC に対して風景を描写する口述をテープに吹き込むが，この時 EC が FC に対してどのような言語で語りかけるかが検討された。その結果，FC の「流暢ではない英語」の口述を聴いた後では，EC はフランス語を用いる（つまり収束する）程度が高かった。また，フランス語がうまく話せないことを詫びる，英語を話す速度を落とす意向を示すといった部分的収束は，「流暢な英語」や「混合」条件の口述テープを聴いた後に多かった。「フランス語」条件では収束，部分的収束ともほとんど見られず，EC は英語を用いることが多かった。このように話し手が収束を示した場合，聞き手もお返しとして好意を示すために収束をしやすい。

分岐について示した研究の一例に，Bourhis & Giles（1977）のものがある。標準的な英語を話す面接者が，ウェールズ語話者を対象に調査を行ったときに，わざと，ウェールズ語を「将来性のない，死滅しつつある言語」と表現した。するとウェールズ人たちは，面接者の発言は自分たちの民族アイ

デンティティを脅かすものであると感じ，逆に，ウェールズ・アクセントを強めたり，ウェールズ語の単語や句を多用したりした。

ところで収束と分岐には，いくつかのパターンがある。まず第一に，「上方（upward）か下方（downward）か」という違いである（Giles & Powesland, 1975）。「上方収束」は，上流階層のインタビュワーの格調に受け手が合わせようとするような場合である。「下方収束」は，身分の高い者が低い者に対して親しみやすい言葉遣いで話しかけるような場合である。「上方分岐」は，標準語でない者に対して，早口で教養のあるアクセントで話すような場合である。一方，「下方分岐」は，自身の低い格式の少数派の伝統を強調するような場合に見られる。

「単一的（uni）か多面的（multi）か」については，Bilous & Krauss（1988）の研究では，女性は男性に対しいくつかの次元（発話量や割り込みの程度）について収束が見られたが，同時に「笑い方」については分岐が見られた。このように相手に収束あるいは分岐するにあたり単一次元で行うのか多面的次元で行うのかの違いが考えられる。

「全面的か部分的か」については，Street（1982）によると，例えば毎分50語の速さで話す話者が，毎分100語の速さで話す相手と話す際に，相手に合わせて同じ100語／分のスピードで話せば「全面的」な収束といえよう。75語／分のスピードで話せば「部分的」な収束と考えることができる。これはある次元についてどの程度相手に合わせるかについて言及するものといえるだろう。

「対称的（symmetrical）か非対称的（asymmetrical）か」については，会話を行う2者が，相互にアコモデーションを行うか，一方の者だけがアコモデーションを行うかについて注目している。White（1989）の研究では，日本人とアメリカ人の会話場面において，日本人は，相手によらず一定のあいづちを打つというスタイルを維持したが，アメリカ人は日本人相手の場合，日本人の会話スタイルに合わせるべくあいづちを増やすという収束を示した。この場合は，非対称的パターンといえよう。

「主観的（subjective）か客観的（objective）か」については，収束と分岐を組み合わせると表1のように4つのパターンで表される（Giles & Coupland, 1991）。主観的とは話者の信念に関するものであり，客観的とは，具体的な言語の使い方などで測定可能なものである。橋内（1999）によると，表1中のAは心理的に近い（友人，家族）場合で，同じ言語を使おうとする。いわゆる「われわれ」意識や共同体意識が働くと考えられる。Dは相手とは関わりたくない（心理的に遠い）とか反感を持っている場合である。口論の際は，相手が使わない言語をあえて使う。Cは心理的には収束しているが，言語はバラバラな状態である。親しくなれば友達どうしでも，それぞれが自分の地域の言語でしゃべることがある。Bは心理的に離れていながら，同じ言語を使おうとする場合である。スパイ活動とか，無理やり入らされたクラブやサークルの中でうまく適応するためというのが，その例となるだろう。

表1　アコモデーションの主観的ー客観的次元

		主観的	
		収束	分岐
客観的	収束	A　心理的に近い者どうしで、同じ言語を使おうとする。	B　心理的には離れているが、同じ言語を使おうとする。
	分岐	C　心理的には収束しているが、異なる言語を使おうとする。	D　心理的に離れており、異なる言語を使おうとする。

4．アコモデーションの動機

収束の動機として，①社会的承認，②コミュニケーションの効率を高める，③相手と分かち合う自己および集団イメージの獲得，④状況的な制約などが挙げられる（Giles et al.，1987）。社会的承認とは，他者からの承認を獲得したいという欲求であるが，ここにはByrne（1971）の類似－魅力理論が関わってくる。人は類似した他者に魅力を感じ，その者に社会的報酬をもたらしうる。共通の言語スタイルへと収束することで，コミュニケーションの効率を高めることができる。他者に対する予測可能性を高め，不確かさを低減し，対人不安を低め，相互理解を高めることが期待できる。ただし，収束が常に報酬をもたらすとは限らない。冒頭の場面で，学生が教師に調子を合わせることでその場では一定の報酬を得ることができるかもしれないが，学生は自分の社会的アイデンティティを喪失し，他の学生達（内集団）から裏切り者と見られるかもしれない。第2のコミュニケーションの効率を高めるというのは，会話を分かりやすくすることである。例えば，小さい子どもやお年寄りと話す時に，相手に合わせるように明快でゆっくりと易しい言葉で話すような場合である。第3の相手と分かち合う自己および集団イメージの呈示という動機は，相手と合わせることで，ユニットとしての一体感を増し，ユニットとしてのアイデンティティを確立しようとすることである。そして，状況的な制約からの収束は，例えば，販売者が顧客に対する会話で顧客に話し方を合わせるのは，二人の関係性あるいは役割の規範によって導かれると思われる。

分岐の動機は，対話者との差異を強調化することにある。ここにはTajfel & Turner（1986）の社会的アイデンティティ理論が関わってくる。個人間というよりは集団間の文脈で生起する問題である。集団間相互作用では，各個人は社会的カテゴリーのメンバーとして取り扱われる。個人間相互作用では，気質やパーソナリティの個人差を元にコミュニケートし，民族や性別や年齢などは特別視されない。ただ多くの場合，私たちは集団間相互作用の中にいる。服装，装飾，話し言葉，歩き方は，私たちがどのような集団に属しているかをよく表している。分岐により他者との差異化が図られ，内集団のプライドを感じ，ひいては自尊心を高めることにもなる。私たちは多くの社会的集団に属しているので，多面的な社会的アイデンティティを持つことになり，それが，いろいろな相互作用の中で顕現化することになる。冒頭の例では，教師と学生，日本人とアメリカ人，男と女，年配者と若者などカテゴリーが混在している。

分岐はまた，受け手の帰属や感情を形成するために適用されることもある。フランス語話者は，会話の中にフランス語の単語を織り交ぜることで，相手に自分は異なる言語圏の人間であることを知らせようとする。その他の動機として，分岐は相手により効率的なコミュニケーションを取らせるよう働きかける。冒頭の例では，もし学生が大声で大げさに話していたら，教師は分岐の方略で，より落ち着いた思慮のあるスタイルへと変えようとするであろう。

5．アコモデーションの評価

多くの場合，収束する話者は分岐する話者よりも受け手に好意的に評価される。アコモデーションの評価は，受け手が収束の動機をどのように受け取るかにより決定される。受け手は，①相手の言語能力，②相手の努力の程度，③外圧の有無といった要因を考慮する（Simard，Taylor，& Giles，1976）。母国語の異なる二者が会話するときに，相手の言語能力が十分でないと分かれば，収束しなくても否定的評価にはなりにくい。また相手が強

いショックを受け取り乱しているときに収束をしなくても否定的には受け取られない。

受け手の中には，一定の適切なアコモデーションへの期待がある。会話する2者に地位の格差があった場合，低地位の者は高地位の者に収束することが期待される。冒頭の場面では，学生は教師に話す時，あらたまった口調で，専門用語など織り交ぜながら話すであろう（上方収束）。逆に教師は学生に対し，口語的で平易な言葉で話そうとするかもしれない（下方収束）。期待に合致した収束は，高評価を受ける可能性を高めるが，学生の上方収束に対して，教師は，有能さと受け取るのではなく，出しゃばりとか慎みがないと受け取る可能性もなくはない。逆に教師の下方収束は，学生から無理に調子を合わせているのではと受け取られるかもしれない。過剰収束（over convergence）は，評価を低めることもある。Giles & Smith（1979）の研究では，発音，発話の速度，発話内容という3要素について，それぞれ話者が収束するかしないかを操作した。内容における収束がない時に，発音や速度の要素を収束すると話者への好意は高まったが，内容における収束があるときに，発話も速度も両方とも収束すると好意は高まらなかった。複数の要素で同時に収束することは過剰であり，話者の取り入りではないかと受け取られた可能性がある。別の例として，高齢者に対して，分かりやすさを念頭に，ゆっくり，平易に，温かい言葉で話しかけることがある。これは高齢者に対する収束であるが，高齢者に対するステレオタイプに基づく過剰収束といえる（Edwards & Noller, 1993）。このような話し方に対する評価は，否定的なものとなるだろう。

分岐が肯定的に評価されることもある。これはコミュニケーションの相手からの評価というよりは，そのコミュニケーションを観察している人からの評価である。Tong, Hong, Lee, & Chiu（1999）によると，中国へ譲渡される1年前の香港で行われた調査で，香港に強い帰属意識持つ人たちは，中国本土に帰属意識を持つ人たちよりも，標準中国語を話す人に分岐する内集団のメンバーを好意的に評価していた。

6．CATの適用

CATの原点は，母国語の異なる2者間の発話スタイルの調整に焦点を当てたもの（Giles et al., 1983など）であるが，コミュニケーションを伴う相互作用の一般的なモデルへと拡張されている。文化間，世代間，性別間といった異なる集団間のコミュニケーションへの適用がなされている。

(1) 異文化間コミュニケーション

異文化間コミュニケーションは，当事者のもつ社会的アイデンティティを強く喚起させる。日本人であれば，日本人（という内集団）アイデンティティを意識しながら，外国人（外集団）とコミュニケーションをすることになる。例えば，Ross & Shortreed（1990）は，日本において，日本人に日本語で話しかけた（つまり収束した）外国人は，その日本人から英語で受け答えをされるという，同時収束が起こることを見いだしている。ネイティブでない人が日本語を話すことは，日本人としてのアイデンティティを脅かす行為と受け取られる。そのため，日本人は内集団と外集団の境界を明確にするために，英語による受け答えをしたのかもしれない。Bourhis（1984）の研究は，カナダのモントリオール（ここでは大多数はフランス語を使用するが，英語も話せる）で実施されている。フランス語話者と英語話者の通行人に，英語かフランス語で道を尋ねた。すると，英語話者の30%は，フランス語で話しかけられても，英語で受け答えをした（フランス語で受け答える十分な語学力があっても）。逆に，フランス語話者は3%しか，英語を話す相手に対してフランス

語を使わなかった。このことからモントリオールでは，英語を通常語とする少数派集団は，フランス語を話す多数派集団の中において，より高い地位と権力を持っている（集団である）ことを示そうとしていることがうかがえる。

さてCATは第二言語習得プロセスを説明する理論として言語学の分野で用いられることもある。第二言語習得の失敗は，必ずしも学習者の無能さには帰属されない。むしろ集団間のアコモデーションの問題として捉えることができる（Kraemer, Olshtain, & Badier, 1994）。他集団の言語を学習することは，収束と解釈することができる。ある集団が，他言語の習得を自分たち自身の価値のあるコミュニケーションの喪失と受け取れば，彼らは，母国語の単語や文法や発音をその言語に混ぜこむか，全く習得しないかのどちらかであろう。そのどちらでも第二言語習得の失敗となるが，内集団からは成功した分岐（あるいは維持）と受け取られるだろう。

⑵　世代間コミュニケーション

若者と高齢者といった世代間のコミュニケーションでは，その2者間で異なった価値観や信念，言語コードが存在している。老人は若者へはあまり収束しない(Kemper, Vandeputte, Rice, Cheung, & Guberchuk, 1995）が，若者は老人に過剰な収束を示す（Williams & Giles, 1996）。若者は，相手の老人の能力とか欲求などお構いなしに，単純な話題を選び，基本文型で，ゆっくりしたペースで話し，大げさな丁寧さと注意を払いがちである。老人への過剰収束は「押しつけ言葉（patronizing speech）」と呼ばれる（Harwood & Giles, 1996）。これは「赤ちゃん言葉（baby talk）」で老人に話しかけるようなものである。このような行動は，老人に対するネガティブなステレオタイプ（もろく，魅力のない，ゆっくり，役立たず）に基づいている（Williams & Giles, 1996）。このような話し方は，尊敬に欠ける無神経なものと知覚され，多くの受け手は，サポート的でなく不快と感じている。CATの視点から，世代の異なる者たちにとっての適切な収束を模索することは，両者の適応を考える上で役に立つであろう。

⑶　性別間コミュニケーション

男性と女性では，同性どうしか異性どうしかといった状況でコミュニケーション行動が異なる。つまり相手の性別に合わせてコミュニケーション・スタイルを調整しているということである。Hannah & Murachver(1999）によると，人は，自分の性別よりも相手の性別に合わせて話し方を調整することを見いだしている。彼らは，男性と女性のサクラに，促進的（女性的特徴）発話か非促進的（男性的特徴）発話をさせて，アコモデーションに及ぼす性別および性別的発話の影響を検討した。男性と女性の実験参加者では同じサクラに対して異なる行動は取ったが，サクラの性別の影響よりは，サクラの性別的発話スタイルの方に大きく影響を受けていた。

ロマンティックな状況では，特異なパターンが生じることもある。男性は，ピッチ（音程）を深くすることで，男性的な声を強調することがある（Hogg, 1985）。女性は，声を柔らかくすることで女性らしさを強調することがある（Montepare & Vega, 1988）。これは，相互に分岐しているようにも見えるが，会話の補完と見ることもでき，心理的な収束動機に基づくものであり，社会的（性的）アピールとして解釈することができよう。

7．社会心理学におけるCATの応用

さてCATについて概略を見てきたが，社会心理学の中でこの理論に関する注目は必ずしも高くはないようである。日本においてCATを紹介している社会心理学関連の文献は，岡本（2006），中村・長岡（2009），長岡（2006）などごく少数である。社会心理学で

は，古くから相互作用者間の同調について検討がなされてきた。相互作用の相手との間でコミュニケーション行動が連動し，パターンが類似化していくことを同調傾向という（大坊,1999)。中村・長岡（2009）によるまとめでは，同調の現象は，同期（synchrony)，エントレインメント（entrainment)，一致（congruence)，ミラーリング（mirroring)，姿勢共有（posture sharing)，模倣（mimicry，imitation)，協調（coordination)，均整（symmetry）といった用語で表現されてきたと指摘している。CAT の収束（convergence）もそれらの一種と考えられる。本稿の最初に述べたように，CAT は当初は SAT という発話における同調現象に着目したものであった。その後，発話以外のコミュニケーション行動全般への拡張がなされたわけであるが，その時点で既存の同調現象に関する諸研究との類似点・相違点についての説明はあまりなされていない。この点については，今後，関連概念の整理をしていく必要があるだろう。

また社会心理学では自己呈示あるいは印象操作に関する研究も多数行われている。自己呈示とは，他者によって知覚される印象をコントロールする過程である（Leary & Kowalski, 1990； Schlenker, 1980)。印象をコントロールするために，「取り入り」「自己宣伝」「威嚇」など様々な方略が取られる（Jones & Pittman, 1982)。自己呈示の動機は Leary & Kowalski（1990）によると，社会的・物質的報酬の獲得，自尊心の維持，アイデンティティの確立がある。これは CAT の扱う方略やそれらの導出動機と重なる点が多い。そのため社会心理学では，この種の行動（CAT でいうところの収束）を研究として扱う場合，自己呈示を理論的背景にしてなされることが多いといえよう。CAT は自己呈示の概念を取り込んでいるが，自己呈示との類似点・相違点についての考察も，今後していく必要があるであろう。

社会心理学における CAT の応用を考える場合，もっとも親和性の高い理論が Tajfel & Turner（1986）の社会的アイデンティティ理論であろう。この理論では，個人は自尊心を維持するために，社会的アイデンティティの源泉である内集団と外集団とを区別するとしている。CAT はそもそも民族的・文化的背景の異なる者どうしのコミュニケーションに着目しており，これは集団間コミュニケーション研究として捉えることができよう。Hogg & Abrams（1988）は，社会心理学における「言語」の取り扱いについて以下のようにまとめている。社会心理学の分野では，言語は基本的問題でありながら長年無視されてきた。社会言語学の分野では，社会的状況における言語活動に着目はしているものの，社会構造と個人の言語行動の間に動機づけ・信念・アイデンティティといった弁証法的な媒介物を扱う社会心理学的な要素を持たないので，その研究は記述的で方向性がないものであった。やがて言語社会心理学という分野が登場し，そこでは社会的アイデンティティ理論が採用されている。この理論は，発話や言語にはカテゴリーの成員という情報が含まれており，それゆえ社会的アイデンティティのメカニズムを通して，集団間の関係とその関係についての主観的知覚がダイナミックに言語行動に関連しているという事実を強調する。CAT は，社会的アイデンティティと集団間の関係を考慮しながら，社会的出会いにおける発話や言語の変化について注目し，それが個人の動機づけにどのような影響を受けるかを扱うことができる。

同調傾向や自己呈示や社会的アイデンティティ理論といった既存の社会心理学の理論とうまく融合しながら，会話におけるアコモデーション（収束や分岐）の実証的研究を発展させていくことが今後は望まれる。

註

1）‘accommodation’の訳語としては，「適応」「調節」「応化」などが考えられるが，本稿ではそのまま「アコモデーション」とした。また，‘convergence’の訳語は，「収斂」「集中」あるいは意訳をして「同調化」なども考えられるが，本稿では「収束」とした。‘divergence’の訳語も，「分離」「拡散」「発散」「逸脱」あるいは意訳をして「差異化」などが考えられるが，本稿では「分岐」とした。

［引用文献］

Bilous, F. R., & Krauss, R. M. (1988). Dominance and accommodation in the conversational behaviors of same- and mixed-gendered dyads. *Language and Communication*, **8**, 183-194.

Bourhis, R. Y. (1984). Cross-cultural communication in Montreal : Two field studies since Bill 101. *International Journal of the Sociology of Language*, **46**, 33-47.

Bourhis, R. Y., & Giles, H. (1977). The language of intergroup distinctiveness. In H. Giles (Ed.). *Language, ethnicity and intergroup relations*. London : Academic Press, pp. 119-135.

Byrne, D. (1971) *The Attraction paradigm*. New Yourk : Academic.

Coupland, N. (1984). Accommodation at work : Some phonological data and their implications. *International Journal of the Sociology of Language*, **46**, 49-70.

大坊郁夫（1999）．同調傾向　中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典　有斐閣

Edwards, H., & Noller, P. (1993). Perceptions of overaccommodation used by nurses in communication with the elderly. *Journal of Language and Social Psychology*, **12**, 207-223.

Giles, H. (1973). Accent mobility : A model and some data. *Anthrological Linguistics*, **15**, 87-105.

Giles, H., Bourhis, R. Y., & Taylor, D. M. (1977). Towards a theory of language in ethnic group relations In H. Giles (Ed.). *Language, ethnicity and intergroup relations*. London : Academic Press, pp. 307-348.

Giles, H., & Coupland, N. (1991). *Language : Contexts and consequences*. Pacific Grove : Books/Cole.

Giles, H., & Johnson, P. (1987). Ethnolinguistic identity theory : A social psychological approach to language maintenance. *International Journal of the Sociology of Language*, 68, 69-99.

Giles, H., Mulac, A., Bradac, J. J., & Johnson, P. (1987). Speech accommodation theory : The first decade and beyond. In M. McLaughlin (Ed.). *Communication Yearbook*, 10. Newbury Park : Sage, pp. 13-48.

Giles, H., & Ogay, T. (2007). Communication accommodation theory. In Mahwah, N. J. (Ed.), *Explaining communication*. Lawrence Erlbaum Associates, pp. 293-310.

Giles, H., & Powesland, P. F. (1975). *Speech styles and social evaluation*. London : Academic Press.

Giles, H., & Smith, P. M. (1979). Accommodation theory : Optimal levels of convergence. In H. Giles & R. N. St. Clair (Eds.) *Language and social psychology*. Oxford : Blackwell, pp. 45-65.

Giles, H., Taylor, D. M., & Bourhis, R. (1973). Towards a theory of interpersonal accommodation through language : Some Canadian data. *Language in Society*. **2**(2), 177-192.

Hannah, A., & Murachver, T. (1999). Gender and conversational style as a predictors of conversational behavior. *Journal of Language and Social Psychology*, **18**, 153-174.

Harwood, J., & Giles, H. (1996). Reaction to older people being patronized : The roles of response starategies and attributed thoughts. *Journal of Language and Social Psychology*, **15**, 395-421.

橋内 武（1999）．ディスコース くろしお出版

Hogg, M. A. (1985). Mascline and feminine speech in dyads and groups : A study of

speech style and gender salience. *Journal of Language and Social Psychology*, **4**, 99-112.

Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). Social identifications : A social psychology of intergroup relations and group processes. Routledge. (ホッグ, M. A.・アブラムス, D. 吉森護・野村泰代 (訳) (1995). 社会的アイデンティティ理論 北大路書房)

Jones, E. E., & Pittman, T. S. (1982). Toward a general theory of strategic self-presentation. In J. Suls (Ed.), Psychological perspectives on the self (vol. 1). Hillsdale, NJ : Erlbaum, pp. 231-262

Kemper, S., Vandeputte, D., Rice, K., Cheung, H., & Guberchuk, J. (1995). Speech adjustments to sging during a referential communication task. *Journal of Language and Social Psychology*, **14**, 40-59.

Kraemer, R., Olshtain, E., & Badier, S. (1994). Ethnolinguistic vitality, attitudes, and networks of linguistic contact : the case of the Israeli Arab minority. *International Journal of the Sociology of Language*, **108**, 79-95.

Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management : A literature review and two-factor model. Psychological Bulletin, **107**, 34-47.

Montepare, J. M., & Vega, C. (1988). Women's vocal reactions to intimate and causal male friends. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **14**, 103-112.

長岡千賀 (2006). 対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者相互影響に関する研究 対人社会心理学研究, **6**, 101-112.

中村敏枝・長岡千賀 (2009). 相互コミュニケーションにおける同調傾向 大坊郁夫・永瀬治郎 (編) 関係とコミュニケーション ひつじ書房 pp. 80-99.

岡本真一郎 (2006). ことばの社会心理学(第3版) ナカニシヤ出版

Ross, S., & Shortreed, I. M. (1990). Japanese foreigner talk : Convergence or divergence ? *Journal of Asian Pacific Communication*, **1**, 135-145.

Schlenker, B. R. (1980). Impression management : The self-concept, social identity, and interpersonal relations. Monterey, CA : Brooks/Cole.

Simard, L. M., Taylor, D. M., & Giles, H. (1976). Attribution processes and interpersonal accommodation in a bilingual setting. *Language and Speech*, **19**, 374-387.

Street, R. L., Jr. (1982). Evaluation of noncontent speech accommodation. *Language and Communication*, **2**, 13-31.

Tajfel, H., & Turner, J. C. (1986). The social identity theory of intergroup relations. In W. Austin & S. Worchel (Eds.). *Psychology of intergroup relations* (2nd ed). Chicago : Nelson Hall, pp. 7-17.

Tong, Y.-Y., Hong, Y.-Y., Lee, S.-L., & Chiu, C.-Y. (1999). Language use as a carrier of social identity. *International Journal of Intercultural Relations*, **23**, 281-296.

White, S. (1989). Backchannels across cultures : A study of Americans and Japanese. *Language in Society*, **18**, 59-76.

Williams, A., & Giles, H. (1996). Intergenerational conversations : Young adults' retrospective accounts. *Human Communication Research*, **23**, 220-250.

[Abstract]

An Application of Communication Accommodation Theory for Social Psychological Research

Yoshimasa KURIBAYASHI

This paper introduces an outline of the Communication Accommodation Theory (CAT) and discusses its application to social psychological research. Giles (1973) developed CAT to explain the adjustment of an individual's way of communication in interlocution. Convergence is the concept that individuals change their speech (or behavior) pattern in order to be similar to their interlocutor. Divergence occurs when individuals emphasize the difference between their interlocutor and themselves. In this paper, the principles of CAT, the strategy of accommodation, motives, evaluation and an application of CAT are introduced. Finally, it is concluded that future research of CAT is necessary in regards to the social psychological topic-synchrony tendency, self-presentation and social identity.

Key words : Communication Accommodation Theory (CAT), Synchrony Tendency, Self-presentation, Social Identity